

# たより 『美紗の会』 ニュース 第51号

平成17年 8月30日

発行者 「美紗の会」  
☎03-3441-2726  
編集責任者 大久保 朋子

## 戦後六十年に想う

西松 布咏

自然の音があまり聞かれなくなった都会でも突如、蟬時雨がどこからか聞こえてきてはつとすることがある。六十年前の八月十五日の終戦日はことさら暑く蟬の音が玉音放送を消すかのように身体中に響いていくと聞く。戦後六十年の特集番組があとで放映され戦後生まれの私でも思わずその画面に吸い寄せられるが、先日「最後の軍人小野田少尉の遅すぎた帰還」ドラマを観た。終戦にうすうす気づきながら三十年もの間フリービンのルパンが島でゲリラ戦を続けていたのはなぜか？という重いテーマだった。

陸軍中野学校で徹底的なスパイ教育を受けた彼は一番大切な、人の情を奥底に封印し肉親の呼びかけにすら応じず任務を解いたという。戦争によるマインドコントロールがもたらしたなんという残酷で滑稽ですらある人間ドラマであらうか。戦争は人間が人間でなくたってしまふ底のない落とし穴だ。未だに日本に必要だったのは終戦の為に必要だったとするアメリカ人が大半と聞く。来る十一月三日に美紗の会三十回記念公演会場となる高輪区民ホールで「秋吉敏子ジャズピアノコンサート」が開かれた。

「来年で私のピアノ活動も終戦と同じ六十周年になります」と語った彼女の鍵盤をたくりリズムのなんと軽やかでエネルギーギッシュなこと！一九五六年単身で渡米し爾来輝かしい活躍をついに「国際ジャズ名譽の殿堂」入りをする日本人として初めて果たす。一九九九年に広島を訪れたときにあるご住職から「広島原爆」についての曲を依頼されたがあまりにも重く悲愴なテーマなので何度か断つたという。しかし写真集のページをめくった時にある場面に出会った。少女が焼け跡の穴の中から顔を出した時の瞳の輝きに釘づけになった。悲しみの曲は作れないがこれからの希望を見出す曲なら作れるかもしれないと。「ヒロシマ」の曲が生まれたという。「音楽家は世界を社会的に変えることは出来ないという意味では無力存在だが自分の周りで起こっていること、また過去について深い関心を持ち自らの作品や演奏を通してその感情を表現する事はできるはずだ」とコンサート最後の最後に語り大きな瞳を輝かせ舞台を後にした。常々音楽家の道を選んだ自分がこの社会でどんな役に立っているかを考えている私に立って彼女の言葉は勇気を与えてくれたとても幸せなひとときだった。

私の友人に鹿児島生まれのカメラマンがいる。ある時「僕の故郷の国分半人地区は古代の遺跡が多くあり熊襲の穴もそこひとつ。それを観に来ませんか？」と誘われた。彼は密かに「熊襲の穴コンサート」を目論んでいたのだ。百畳ほどの内部の壁や天井には鮮やかに芸術的な絵が描かれていてまさに伝統II前衛

このようなことからアーティストによる音楽、詩（朗唱）に表現していただき国籍、知名度などを越えたい心を開き、無と平和を愛する新たな「民族の誇り」をテーマとしたイベントを考えています。音楽的パフォーマンスに最適な熊襲の穴を選んだのは神話ですぐに語られていますがこの熊襲や物語の最後に深い心を感したからでした。朝庭に反抗し熊のように猛々しい熊襲は穴の中で酒宴をしていました。そこに大和朝廷から討伐を命じられ女装した日本武尊が剣を忍ばせ入ってくる。熊襲の首領の川上臯師（かわかみあすのし）は十六歳の美しい武尊を側面に呼ぶ。宴もたげなげな川上臯師は川上の階の下で武尊は川上の背中に抱いて剣を後ろから刺し貫く。息絶え絶えの中、大和朝廷からの刺客だと聞く川上は「我以上に勇猛な男がいなさう。お前に私の名を献上しよう。今後は後タケルと名乗るがよい。」ヤマトケルと名乗る。しかし異変を感じた熊襲たちはヤマトケルを潰そうとするがまだ息のあった川上は「ヤマトケルに手を出すな。今日から熊襲を解散する」と皆に告げます。それ以来熊襲は歴史から姿を消し史実にも出てこなくなるといいます。刺客に川上は何を感じたのだろうか。その目に純粹な心を感したのだろうか。人々が殺しあうことの儂さを感じたのだろうか。スパー歌舞伎で梅原猛脚本の「ヤマトケル」が上演されたがこのようなドラマがベールに包まれた。それにしても我々はこの神話から多いに学ばねばならぬと勝組。負け組。と決め付けて、この本質をばやかしらした今日日本は唯一の被爆国でありながら過去を振り返るに神に祈るわが日の本波立たぬよう」のフレーズを繰り返しながら、ますます平和を望む気持ちが強く沸き起こりました。

## 江戸の舟遊びの記

縄岡 好人

七月十七日、「屋形船で粋な江戸の舟遊び」西松布咏さんとともに初めて屋形船に乗った。船宿は神田川が隅田川に流れ込む河口に架かる柳橋のたもとにある小松屋。柳橋界隈といえは、山本周五郎や池波正太郎など多くの時代小説で登場する。池波正太郎の刺客商売では「浅草の平右衛門町にある吉野家が鼻以前、恩師の秋山小兵衛が鼻肩にしていた船宿」とある。大川（隅田川）は江戸の大動脈であり、吉原方面への渡船場でもあったので、柳橋には船宿が軒を連ねていたそう。幕末以降は花柳街として発展し、昭和初期頃まで、料亭や船宿などが建ち並ぶ情緒あふれる地区であったようだが、橋詰の石垣には、正岡子規が詠んだ「春の夜や女兒返る柳橋」繁沢な人の涼みや柳橋が刻まれている。現在も川の両岸には屋形船の発着場が並び往時の片鱗をうかがわせているが、街並みも建物はコンクリート造であり、柳橋も近代化のデザインをモデルとした鋼鉄橋である。花街にちなんで欄干にはかんざしがあしらってあるが、芸者さんも六年前に組合が解散してしまっただけで、

さて、我々の屋形船は、両国橋・清洲橋・相模橋・晴海橋をくぐりながら隅田川を下り五分程でお台場に到着した。ここで碇を下ろして停泊し天ぷら、さしみの酒宴が始まる。この辺りは、屋形船の定番コースとなっていて、多くの屋形船が集まっているのが見える。隅田川花火大会の時、その昔、人間の営みがあったとは到底思えない何も無い空間に糸と声だけが響き渡り古代を交信した。「花も雪も払えば清き袂かな。ほんに昔のむかしのことよ……」。いつか先達の必死の魂が現代人の心に届くよう祈りながら、ひたすら唄い続けてゆきたいと思う今日である。

さらでもない貴方と私、せめてしるしの対浴衣。「軒つばめ」燕のようにすいすいと行ってしまう貴方、今度帰ってきたら愚痴の一つも言っておもうと思ってるのに、会うと胸が震えて何にも言えない。現代のCM「亭主元気で留守が良い」と大きな違いがある。新内小唄「夢の柳橋」、小唄「味」と続いて、江戸舞台上の演物に合わせて作られた小唄と歌沢。ひとつは慶応の元年市村座で上演された白波五人女の晴れて雲間。もう一つは安政三年中村座で上演された吉原の遊女瀧川の悲恋物「今朝の雨」。そして、木遣り入りで賑やかな唄唄「あじさい」で終演。先日の赤煉瓦文化サロンで田中優子先生が「布味さんの唄は空間の大きさを聴き手に感じさせる」と評されたが、今回も「並木駒方」の賑やかな大宴会場から「今朝の雨」では、舞台は一転して障子を閉め切った室内空間へと移り変わったようだった。クラシック音楽のバイオリンなどの洋楽器が建築空間の響きを利用して豊かな音楽を奏でていくのに対して、船のように残響のない屋形船の中でも唄にこめられた空間の大きさを感ぜさせる師匠のすばささと邦楽の奥深さに魅了された。今回生まれて初めての屋形船は、とても楽しい新鮮な宴であった。機会があれば、雨の日に少人数で障子を少し開けた屋形船などに乗ってみたいと思う。

# 古希を迎えて

## 本郷公基

高齢社会を迎えた昨今、人生七十年生きるとは稀なることではなくなりつつありますが、私にとって一つの区切りの今日までの自分の人生を振り返って見ようと思えます。

最初に触れておきたいことは昭和二十年の半開の経験です。この年は集團疎開で天橋立にいました。八月十五日、疎開児童は先生と共に玉音放送を聞き日本の敗戦を知り大声をあげて泣きました。翌朝私は一人家の縁側に立ち天橋立の松並木を見つめながら「最後の一人になってアメリカと戦うぞ」とひそかに自分自身に誓ったものでした。

黒く塗り潰した教科書から新しく教科書に変わり映画館では東京裁判のニュースをみながら「戦前の教育は全面否定され、民主主義を教えられた。学校でも自治会が組織され私は小学校六年生のとき、校内自治会会長に選ばれましたが、何をしたいのかわからずとどまっていた。先生は自分で決めて決めたことといわれるだけで、ご自身もよく判らなかつたのだと思います。議長席に座った私は誰も何も発言せず沈黙の瞬間が続くのがつらくて「喧嘩は止めよう」とか「遅刻をしないように」とかつまらないことを決めて自己嫌悪になっていったことを思い出します。

私は今もこの国の民主主義に疑問を抱いていますが、このときの経験が原点にあると考えています。

校長先生から同志社志望の理由を聞かれ「これからの日本は世界の国々と仲良く手をつないでいかねばなりません。そのためにはまず世界中で話されている英語ができなければなりません。その英語を勉強するにはこの同志社が一番相応しい中学だと思つて受験しました」と目を輝かせて答えました。

同志社中学で英会話の米人ミス・グリンの人格とまじめな授業態度、鎖国の禁を破り独り渡米した校祖新島襄を支えたい何人かのアメリカ人の事を知り私は次第に米国が好きになっていきました。(毎朝の礼拝、チャペルの雰囲気そして何より賛美歌に一種のカルチャー・ショックを覚えた事を忘れられません。)

京都大学の教養課程では、アルバイトに精を出してありますが勉強しませんでした。経済学部でしたので社会主義と資本主義のどちらの制度が人類を本義に幸せにできるか、一生懸命考えていました。当時はマルクス経済学全盛の時代で学生運動も盛んでした。貧しい人たを幸せにするという意味でマルクス経済学に魅せられたのは否定できませんが、三回生で選んだのは近代経済学の方でした。理由はいろいろありましたが、愚直な私を案じて「アカになったあかんええ！」と繰り返して訴えていた最愛の祖母の心情に抗えなかつたからだと思います。

就職を考え始めた頃、敗戦の経験から平和な世界を築きたい、そのために国連のような組織で働けないものかと考えていました。まずは外交官を目指そうと考えていろいろ調べてみたところ、外交官になるには自分の大学では難しい、家柄も良くない、またこの学力では外交官試験に通らないだろうと悟り、それから国際貿易に関する仕事をしながら世界の国々と仲良くしたいというふうに思ふようになりました。

商船三井と関連会社での会社生活三十数年を終えて、若き日の志を少しでも実現できたのかを考えると内心忸怩たるものがあります。貿易立国日本を支えるのが海運業の為に全力投入したことは良しでしたが、そのため家庭を犠牲にし、妻や子供達に何も出来なかつたことには悔いが残ります。

日本の海運業界は国際競争に勝つため他産業に先駆けて集約合併、外国人船員の配乗、業務の分社化や海外移転等を実施したため、今や商船三井は極めて業績好調であり、企業OBとして業績好調に喜ばしいと思えます。しかし合理化のため外航海運に働く日本人が極端に少なくなつてしまったことは寂しいことです。日本の船会社が運航する約二千隻の外航船のうち日本国籍船が百隻弱しかないのは「国家の安全保障上これだけのいかと心配になります。社会主義の計画経済の方が人類をより豊かに出来ることを二十世紀の歴史が証明し、大学の経済学の選択が正しかったことに自己満足していますが、一方市場経済の問題点・特に利益を挙げるために手段を選ばなくなるの点が次々と噴出してくるのを観ると悩みは絶えません。例えばJR西日本の福知山線の悲惨な事故をTVで観て同じ運輸業に従事した自分には他人事とは思えないのです。私企業としてリストラされた従業員を四割も削減し、阪急のスパイド競争のため無理なダイヤを組み、運輸業の最大のテーマである安全運航を怠つたことは経営として失格と断

定したいのですが、鉄道会社が安全運行と採算のバランスをとることは極めて難しいものです。

小泉構造改革の柱である「官から民へ」を基本的には支持している私ゆえに過去の成功例として挙げられてきた国鉄-JRがこの結果を生み、誠に誠に残念でなりません。

六十五年で会社生活を引退して五年になつてしまつていますが、最近にはボランティアの地域活動がますます忙しくなつて、家内の評判が頗るよろしくありません。

女房に「あなたはいつも何か旗印を立てていないと生きられない人ね」と言われます。「そうだよ、自分は本来怠け者で何か目標を立てていないと自堕落な生活を送つてしまつたから」と答えています。自分分は常に「Set the goal how」を考えて目標を設定してきました。今私が掲げた旗印として「少子高齢化にどう対応していくか、特にわれわれ高齢者が「健康で、生甲斐を持ちながら天寿を全うする」ためには何をすべきかを鎌倉市生涯学習推進委員の会長として考えていきたい。」

\* 一方西鎌倉地域教育懇話会の会長としては「新しい学習指導要領」と「総合学習」にジャーナリズムの批判が集中しているのが、地域の教育の実態はどうなのかを明らかにして、これからの教育のあり方を考えていきたい。」

\* そして西松布吹師匠のすばらしさをより多くの人に認識してもらおうと努力し、併せて美術の会を立ち上げ、併せて美術の会を立ち上げるの発展に微力を尽くしたい。」

最後に一言、私の学生時代に深沢七郎の「楳竹節考」が中央公論新人賞を受賞し評判になり映画にもなりました。私はこの小説を読んだ後、不思議な感動を覚えました。今もこの小説の主人公の生き方に同感を覚えています。高齢化時代の「楳竹にこもる歳」が何歳なのか詳らかではありませんが、

# 「ぶぶ・そんぐ」なり、永遠に

## 増田忠士

平成十七年七月十五日(金)の夕刻、東京・丸の内にある日本工業倶楽部会館にて、赤煉瓦文化サロン「江戸から米ナへ」シリーズの第四回セミナー「三味線のほんとうの魅力」が開催された。

コーディネーターは江戸学の田中優子・法政大学教授、演者は西松布吹さん、その内容を紹介する前に、私と布吹さんの出会いを少し。昨年七月二十四日(土)、原宿のクエストホールで開催された、松岡正剛の「三夜千冊」達成を祝うブックパーティで、布吹さんの声と三味線に触れた。

実は、このパーティ、参加費が高く、仕事も忙しかつたので、ほとんど行く気はなかつた。松岡氏の編集学校の生徒という義理で、ギリギリの選択。開演のベルと同時に駆け込んだことを記憶している。

だからこそ、得難い出会い。は起きやすいものなのだろう。中。無理は時折してあるもの。触れた。ラジオだった。歌詞は分らなくて体の奥深くに響くものがあった。

同じ年の秋、機械体操部に属していた私は、新人戦に臨んだ。思春期、体の線が客しまつたいツツをはい、観客の前で生まれて初めての演技を聴すかしのあまり、緊張は極限に達し、周囲のざわめきが、耳に対する「音」から肌で感ずる「物」に進む。床運動では、自分が進むわたしの五十七センチ幅の道だけにラジオが当たっているように思えた。

そのビートルズと床運動が一緒にあって、約四十年ぶりに蘇った。

### ★今後の予定★

★第三十回記念演奏会「美紗の会」  
会員の個性溢れる唄と三味線の数々に加え千寿文師をはじめ門弟の方々が華麗な舞踊で色を添えて下さいます。  
十一月三日(木)文化の日  
十二時〜十七時  
高輪区民ホール  
終演後品川プリンスホテルにおいて祝賀パーティを予定しておりますので皆様お誘い合わせの上お越し下さい。

★夏から秋へ・音のフレンジー  
ジャズピアノと速弾き子守のFRVのファンキーな日本シリーズの幕開けに西松布吹がゲスト出演。秋の歌の数々を古典と前衛でクオーストパー。  
九月五日(月)六時半〜十時  
テアトロスナガリ青山

### 編集後記

残暑甚しい今日この頃です。皆様、この夏どうお過ごしでしたか。

私は、山の家に、畑の収穫を楽しみに出かけたが、腰まである雑草の中、やっと思つた収穫物は、ブチャマト十個、ピーマン四個、ビチャがいも五個でした！

今回もたよりの収穫は大豊作！素晴らしい記事がいっぱいです。ゆつくり楽しんで下さい。大久保朋子